令和３年１２月３日

銅鐸の謎について

藤代歴史愛好会　石山博

銅鐸について(定説)

一万数千年に渡った悠久の時代、縄文時代が終わり迎え、その後紀元３世紀まで続いた弥生時代と呼ぶのは現在の日本史における共通認識となっています。
弥生時代の開始期については、諸説ありますが、皆さんは弥生時代と聞いてはじめに何を思い浮かべますか。様々な意見があると思いますがここで紹介するのは、誰もが知っているにもかかわらず、現在も様々な謎に包まれている銅鐸について考えます。

日本では当時の遺跡から５００もの銅鐸が出土しており、かつて日本史の授業で「大きな鐘のような出土品」として学んだ記憶がある方も多いのではないでしょうか。
実は、数多く出土しているにもかかわらず解明されていない謎だらけなのです。
「何のために作られたのか、実際にどのように使われたのか。」
「なぜ突然作られなくなり歴史から姿を消したのか」
「なぜ特定の場所にのみ埋蔵されたのか」

これらの疑問に対して諸説を交えながら弥生時代の日本と銅鐸の謎を考えていきます。
さて、弥生時代を代表する出土品である銅鐸は、当時かなり貴重品であったはずの銅と錫と少量の鉛を含んだ青銅器です。鋳型に流し込むという鋳造という方法で作られており、現時点では、紀元前２世紀頃から紀元２世紀のおよそ４００年間に渡って制作、使用されたと云われています。

銅鐸は、鈕（ちゅう）と呼ばれる取っ手状の吊り下げ部分を持ち舌（ぜつ）と呼ばれる木や石、鹿の角から作られた棒を垂らして、胴体部分、もしくは「舌」そのものを揺らし音を鳴らすような構造を持っています。形状は一見「お寺の鐘」を連想しますが、鐘は外側の部分を叩いて鳴らすのに対し、銅鐸は内側から鳴らす為、どちらかといえば（鈴）西洋の鐘に近いと言えるでしょう。

実際に出土状況や痕跡を調べたところ紐で吊るしていたであろう痕、舌を垂らして銅鐸の内部で接触させて鳴らしていたであろう痕跡が見つかっています。
逆に、銅鐸の外側を叩いて鳴らしていたような痕跡は現段階で見つかっていません。
また銅鐸の名称は、古代中国で使用された柄付の楽器である「鐸」の様な形をしていることが語源とされていますが、鐸も先程の鐘と同様、音を鳴らす構造が異なります。

解説：【鐸】たく
１ 銅または青銅製の大型の鈴。扁平な鐘の中に舌ぜつがあり、上部の柄えを持って振り鳴らす。古代中国で教令を伝えるときに用い、文事には木鐸、武事には金鐸を用いたという。鐸鈴。ぬて。ぬりて。　２ 大形の風鈴ふうりん。　出典：デジタル大辞泉「鐸」の解説

歴史書にはじめて「銅鐸」が登場した続日本紀の編纂にあたって、単純に見た目が似ている事から、その名前が付けられたのではないか、とも推測できます。

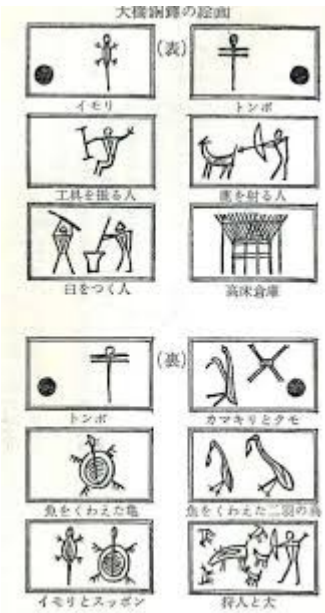
国内で多くの銅鐸が出土していることは先述しましたが、製作年代によって興味深い変化があります。年数を経るごとに大型化し２世紀頃には高さが１ｍを超えるものとなっていきました。滋賀県野洲市では高さが１４０ｃｍ以上重さがおよそ４５ｋｇにも達する日本最大の銅鐸が出土しました。なぜ大型化していったのかについては後述します。

銅鐸の多くは、兵庫県や島根県、徳島県や滋賀県、和歌山県などで多く見つかっていましたが、近年になって北部九州や吉野ヶ里遺跡から発見されるようになりました。また北部九州や吉野ヶ里遺跡からは鋳型も出土しており出雲で出土した銅鐸と酷似していることも判明しました。このような経緯から、最近ではむしろ北部九州から他エリアで広まったのではないかという説が支持を集めているようです。

また、絵や文様が刻まれている銅鐸も多数見つかっています。例えばヒトやシカ、サギなどの鳥や魚イノシシやカエルなど、狩猟や水田など豊かな実りをイメージできるものが多いのです。

さらに香川県で出土した銅鐸に描かれた絵から、生き物が生きていくためには弱者の命を奪うことは避けられない私達人間も鹿や猪を願い年月をかけて狩ってきた。しかし、現在農耕の技術を教えられてからは蔵がいっぱいになるほど作物が実り、明日の食料を憂うこともなくなった。神の恩恵を讃えよう。と解釈する「農耕讃歌説」が現在の定説とされています。

この解釈にたつと、方策を祈願する祭具としての側面も垣間見えます。日本では、縄文時代後期から稲作が行われていたといわれており、狩猟採集が中心の生活から、徐々に農耕生活へ移行していったであろう経緯がわかります。



解説：日本の水田稲作

2003 年に、国立歴史民俗博物館が遺跡からの出土品や土器に付着した炭化物などの年代を炭素 14 年代測定法によって推定した結果、従来の定説より約 500 年ほど早い紀元前 1000 年頃、開始されたとする研究結果を発表している。

しかし陸稲栽培については、岡山の朝寝鼻貝塚から約 6000 年前のプラント・オパールが、また南溝手遺跡からは約 3500 年前の籾の痕がついた土器が見つかっている。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

　では銅鐸はどのような目的があって作成されたのでしょうか。その構造からは音を鳴らすための道具であり、またその装飾からは、豊穣祈願の祭具として、扱われた可能性がある事は紹介しました。これらが一般的な定説とされています。
　その他にも数多くの諸説が存在しています。　一例を紹介しますと、観賞用の美術品である説、天体観測の測定器である説、銅剣などを作成するインゴットである説など用途も様々です。真実が解明されていない以上断定はできませんが、これらの諸説には矛盾点が指摘されています。
　例えば、インゴット説の場合、原料である銅と錫、鉛の比率によって金属の強度が変わることから、まず銅鐸として作成し、音を鳴らす事で、青銅としての妥当性を判断したというのが根拠とされています。しかしながら銅剣などを鋳造するよりも高度な技術を要する銅鐸をあえて作成するのか、大きさも様々でかつ複雑な文様を彫刻した銅鐸をインゴットするのか、という観点から現在は少数意見に留まっているようです。

　年数を経るごとに銅鐸が大型化したことについては、稲作が生活の中心となった弥生時代において、水田稲作への移行に伴って指導者が登場しムラが形成されました。始めは、それぞれ小さなムラが時間や農作業の合図など目的で銅鐸を鳴らして農耕生活を送っていたのではないでしょうか。
　しかし、米は保存が聞くことから個人やムラ単位でも貧富の差が生まれる要因になったといわれています。水田の所有をめぐって争いが生まれた結果集落の大型化や小国への変遷に繋がったと仮定するならば、広い範囲に音を響かせるため、または権威の象徴として銅鐸が大型化した可能性があると考えられます。そう考えると辻褄が合うような気がしますが皆さんはどう思いますか。

　このように使用用途だけでも様々な説がある銅鐸ですが出土した状況にも多くの謎があります。特定の場所に埋葬されていると前述しましたが、その特定の場所とは、何故か彼らの居住区域内ではなく、大半が集落周辺の丘陵の斜面や山腹の頂上付近から出土しているのです。そしてごく少数の例外を除いて、方向が揃えられたうえに水平に寝かされた状態で埋蔵されていたとされています。同じ青銅器である銅鏡や銅剣は墳墓から出土するケースが非常に多い一方で、銅鐸は墳墓から発見されていません。

　これらの発見から銅鐸の使用用途と同様様々な説が論じられることとなりました。しかし、破壊され破片になった銅鐸が出土している事例や、３世紀になって以降突如銅鐸が造られなくなった事から考えると時代背景には、政治的な社会変動、つまり銅鐸への信仰を持たない権力者の台頭や個々のムラを統合する新しい支配者が現れるなどして共同体の祭器から専制的権力者の祭儀への変化が起きたため、各々のムラで使用された銅鐸は不要となり埋葬した。という説が自然なのかも知れません。
　また銅鐸とセットであるはずの舌が一緒に出土されないケースが非常に多いことも謎が深まる原因と言えるのではないでしょうか。「本来の用途としての役目を終えた」と考えることもできますし、「舌と一緒じゃないから鳴らすことはできないぞ」という不穏なメッセージが込められている様にも思えてしまいます。

さて、ここからは視点を変えて、王朝（王権）の変遷から、銅鐸を考えていきます。
日本古代の王朝（王権）と言うと近畿大和王朝をイメージする方が多いと思いますが。
実は、はじめに出雲王朝があって、次に九州王朝、そして近畿王朝（現代まで続いております。）になっていったと考えられます。日本古代の王朝（王権）については次のような説が、考えられます。

古代文明をみると、それぞれ川の名前とセットになっています。「中国文明は、黄河」「インダス文明は、インダス川」「エジプト文明は、ナイル川」「メソポタミア文明は、チグリス・ユーフラテス川」長い名前ですが。それは、２つの川の名前だからです。
メソポタミアとは、現地の言葉で、「大きな川にはさまれた真ん中の土地」という意味だそうです。つまり・・「中国ちゅうごく」　ということです。
実は、隣の国の中国も、元は「黄河と長江にはさまれた真ん中の地」という事だった。ということだそうです。共通しています。

そう言えば、日本にも中国というところがあります。それは、中国地方です。
しかし　大きな川にはさまれた真ん中の土地には見えません。
なぜ日本の中国地方は、中国なのでしょうか？。

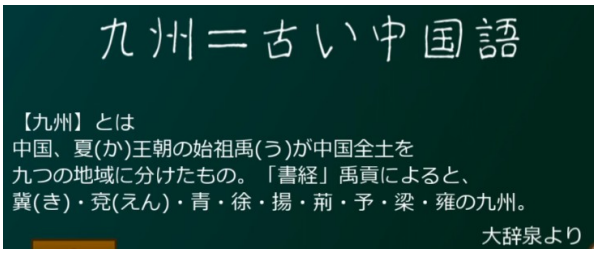
なぜ日本にも中国があるのでしょうか。
大きな川と川にはさまれていないのになぜ中国というのでしょうか。
そのヒントは、近畿地方にあります。
その意味は、　近→近い　畿→お城「王様のいるところ」　・・・だからです。

むかしは、奈良・京都からみて遠い国なので、
九州のことを「遠国おんごく」と読んでいました。
それで、近くの国と遠い国の間なので、
中国と呼ばれるようになったといわれています。

ここで、疑問が出てきます「遠い国は近畿から見て西にしかないのか」ということです。
例えば、東の方向　関東地方を「遠国」、東海地方を「中国」と呼ぶことだって考えられたはずです。この疑問を解決する仮説は、

仮説その１・・当時近畿地方は、国の東の端にあった。
<u>つまり　今の鈴鹿山脈が国境であり</u>
<u>そこから　東は、外国だった</u>。
と考えると「遠国おんごく」は西にしかなかった事になります。

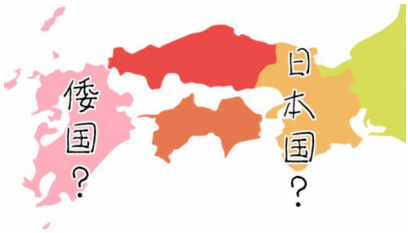
九州の意味とは・・
実は、九州は、古い中国語です。
その意味は、「王が九つの地域に分けて　支配した事に由来する。」ということなのです。



仮説その２・・そうすると　九州には、その昔　王国　があった？。

そうなると、近畿は「王様のいるところ」なので、
九州にも「王国」があったと考えると。
王国と王国にはさまれた真ん中の土地なので、「中国」地方と呼ばれるようになったと考えられます。

日本に、２つの王国があったと考えると思いつくことがあります。
むかし日本は、「倭国」と呼ばれていた。それがいつの間にか「日本」と呼ばれるようになりました。もしかしたら、「倭国」と「日本」は別の国だったのかも知れません。



九州が「倭国」で、近畿が「日本国」だったのかも知れません。<u>実際、中国の古い書物「旧唐書」には、倭国伝と日本国伝が両方載っていて、別の国として書かれています。</u>　このことから

さらに、中国地方の中心が、大国主の国譲り神話の国であり、神庭荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡が見つかった出雲国（王朝）であったと言うことが、銅鐸から想定されるのです。

解説：銅鐸は、紀元前 2 世紀から 2 世紀の約 400 年間にわたって製作、使用されました。
出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：記紀の国産み神話時代の勢力状況

『古事記』、『日本書紀』を国産み順に比較したものである。

古事記	日本書紀					
	本文	一書第1	一書第2	一書第3	一書第4	一書第5
淡道之穂之狭別島	淡路洲	大日本豐秋津洲	淡路洲・淡洲	淡路洲	淡路洲	淡路洲
伊豫之二名島	大日本豐秋津洲	淡路洲	大日本豐秋津洲	大日本豐秋津洲	大日本豐秋津洲	大日本豐秋津洲
隱伎之三子島	伊豫二名洲	伊豫二名洲	伊豫洲	伊豫二名洲	伊豫二名洲	淡洲
筑紫島	筑紫洲	筑紫洲	筑紫洲	億岐洲	筑紫洲	伊豫二名洲
伊岐島	億岐洲・佐度洲	億岐三子洲	億岐洲・佐度洲	佐度洲	吉備子洲	億岐三子洲
津島	越洲	佐度洲	越洲	筑紫洲	億岐洲・佐度洲	佐度洲
佐度島	大洲	越洲	大洲	壹岐洲	越洲	筑紫洲
大倭豐秋津島	吉備子洲	吉備子洲	子洲	對馬洲		吉備子洲
吉備兒島						大洲
小豆島						
大島						
女島						
知訶島						
兩兒島						

表の古事記を見ますと大国（大州）がありません。これは出雲時代の国産み神話と考えられます。また日本書紀の本文から一書第５の中で、大国（大州）がないのは、出雲時代の国産み神話であり、壹岐州、對馬州がないのは、九州王朝時代の国産み神話であり、大国（大州）と壹岐州、對馬州がない（一書第１）のは、この３国が中心の国産み神話と考えられます。王権は、時代とともに変化（推移）していると考えられます。

「銅鐸は出雲王朝の持っていた神宝だった？。」

　南船北馬説（室伏 志畔氏）というのがあります。交通手段に、長江下流の人が船を使い、北方騎馬民族は馬を使った。その違いで、南船系の倭人と北馬系の倭人を考えますと、日本というのは紀元前の５世紀から４世紀頃に長江下流にあった、呉や越の亡国の民が、呉越同舟して黒潮分流に乗って、韓半島や日本列島にやってきました。この人達が王権を作っていったのではないかと考えられます。古代王権は日本海側を流れたと言えます。

　古田武彦氏はどこに王朝の起源を見たかというと呉や越の王権ではなく、あとから天孫降臨で、侵攻してきた朝鮮半島経由の北馬系の倭人の王朝を九州王朝としました。その前には、南船系の倭人の王権があったということになります。日本の古代史は、東アジアの民族移動史の１コマであって、その基本矛盾というのは南船系の倭人と北馬系の倭人の抗争・興亡にある訳です。
　王朝の交替史を、出雲王朝、→九州王朝、→近畿王朝という変遷の中で考えますと、銅鐸の消滅した３世紀が、いわゆる出雲王朝に替わり、九州王朝が列島の盟主になったと言えるのではないでしょうか。

　銅鐸について記紀は何も書いていません。なぜ書かないのかということもまた大きな意味があると思います。これは当然隠したという事になると思います。
九州王朝にとって最大の敵の持っていた神宝が銅鐸であったという事は、九州王朝の皇統（分流の神武を含む系統）にとって、どういう働きをしていたかというと、それを潰しに行ったその役をしていたと考えられるからです。我々は遠い昔より列島を支配していた。それも畿内でやっていたということになっていきました。それが銅鐸が別のところ（実際はあちこち）で出てきたという事は困った話になってくる訳です。それで一切書かない、説明しないことになったと考えられるのです。

　また、記紀には、神代と人代が書かれています。神代は出雲神話が中心にあって、人代は神武東征からの皇室の歴史になってきて書紀では、持統天皇まで続いています。ということは人代は皇室に直接関係のある歴史で、それ以前の歴史は神代という事になっています。しかし歴史ではないとは言ってません。

　今までは、神代はあるけれど論じないほうが良いとされていました。代表的な人物は、江戸時代の山片 蟠桃（やまがた ばんとう）や戦後の津田左右吉などがおりました。
　本当は皇室史の前に出雲王朝などが神話として語られていると解釈されます。つまり天皇前史が書かれていることになります。

解説：山片 蟠桃（やまがた ばんとう、延享 5 年/寛延元年（1748 年） - 文政 4 年 2 月 28 日（1821 年 3 月 31 日））は、江戸時代後期の商人であり学者。極めて唯物論的な立場を取り、天文、宗教、経済、歴史等を百科全書的に論じた『夢の代』は、無鬼論（無神論）の主張、地動説の支持、応神天皇以前の日本書紀の真実性の否定など先進的な持論を展開した点が特筆される。出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：津田 左右吉（つだ そうきち、1873 年（明治 6 年）10 月 3 日 - 1961 年（昭和 36 年）12 月 4 日）は、20 世紀前半の日本の歴史学者・思想史家。『古事記』や『日本書紀』、特に神話関係の部分は後世の潤色が著しいとして文献批判を行った。
出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：出雲王朝説
　古代出雲（こだいいずも）は、弥生時代、古墳時代の出雲の国（現在の島根県東部および鳥取県西部）にある出雲平野、安来平野を中心にあった文化をさす。出雲は歴史的仮名遣いでは「いづも」である。出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』
　かつて、スサノオやオオクニヌシの出雲王朝がこの国を支配していた。韓国から渡来したスサノオは人々を苦しめる豪族＝ヤマタノオロチを退治し、出雲平野に豊かな王国を築くがやがて衰亡。九州から東征してきた天孫族に国譲りを迫られる。
出典: 葬られた王朝―古代出雲の謎を解く―梅原猛／著

解説：九州王朝説
　天孫降臨として伝えられる出来事（BC2 世紀頃）から、702 年の間、筑紫に中国王朝に朝貢し、朝鮮半島に出兵した王朝があったとする。邪馬壱国や倭の五王、『隋書』「東夷伝」に記された俀国（タイ）も九州王朝とする。
出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

　さて、以前は銅鐸文化圏と銅剣・銅矛文化圏という説が有りましたが、１９８４年と１９９６年に出雲の神庭荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡が見つかりました。神庭荒神谷遺跡では、今までの出土数を上回る、３５８本の銅剣が見つかりました。しかし銅剣と言われていますがあれは銅矛と考えられます。加茂岩倉遺跡では、３９個の銅鐸が見つかりました。

　このことは、明らかに出雲王朝があったとなる訳ですが、通説は、皇統一元史観ですのでまだ正式には認められてはいません。銅鐸について言えば、３９個の銅鐸が見つかったという事は、近畿圏の前に出雲に銅鐸王国があったと考えられます。
これは何を意味するのでしょうか。

　ヤマタノオロチ退治で成敗されたヤマタノオロチ族（八雲族）の神宝だったと考えられます。さらに言えば、「八雲やくも立つ　出雲いづも八重垣やへがき　妻籠つまごみに八重垣作る　その八重垣を」は、嘆きの歌ではないか。妻籠つまごみとは「手籠てごめ」ではないか。スサノオ軍の侵攻の際人民への凄惨な行為を象徴しているのではないか。

　これは、六月晦大祓（みなづきのつごもりのおおはらへ）の祝詞にある、国津罪の「母と子を犯せる罪」と同じではないのか。八重垣とは掟・法律の事で、法律が有るにもかかわらずこのような事が行われた事と考えられます。

（以下に、六月晦大祓祝詞の「国津罪（部分）」を示します。）

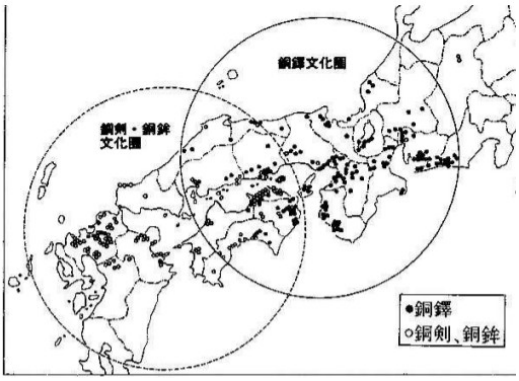
くにつつみと　いきはだたち　しにはだたち　しろひと　こくみ　おのがははおかせるつみ　おのがこおかせるつみ
国津罪と　生膚断　死膚断　白人　胡久美　己が母犯罪　己が子犯罪

ははとことおかせるつみ　こととははとおかせるつみ　けものおかせるつみ
母と子と犯罪　子と母と犯罪　畜犯罪　　（以下略）

　ところが記紀文化というのは、そういう凄惨・恐ろしい事柄等を相聞歌（恋の歌）の方にずらして記述しています。だから日本人は昔から平和であって、そんな凄惨な・恐ろしい事など無いと思わせられてしまった。実際は、おぞましい光景は、記紀や大祓の祝詞に書かれているように侵略戦争の中では繰り返されたと考えられます。

　銅鐸について言えば、出雲が侵略を受けたので、その銅鐸勢力が逃げていったのが、近畿地方であると考えられます。下図の銅鐸文化圏というのは、出雲の銅鐸文化圏が敗れたあとの勢力図だったと考えられます。

　侵略者は、どういう人達かというとそれは銅剣・銅矛を持った人達という事になります。
　しかし神庭荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡で発見されたものは、銅剣・銅矛と言われていますがあれはどちらも銅矛と考えられます。なぜならば、古来から出雲の神（大国主）は、八千矛神（やちほこのかみ）と言われてるからです。やはり矛と考えたほうが良いのではないでしょうか。



　出雲王朝があって侵略されて、人々は畿内に、東へ逃げた。敵は西からやってきたという事になります。神庭荒神谷の３５８本の銅剣の発見というのはどういう事かといいますと大国主の国譲りを示しているのではないでしょうか。出雲が侵略を受けたので、その銅鐸勢力が逃げていったのが近畿地方で、図の銅鐸文化圏というのは後々の状況を示していると考えられます。しかし国譲りが終われば、畿内勢力も侵略の対象となって、最終的には、畿内の銅鐸文化圏も３世紀頃には、滅ぼされてしまった。

　３世紀というのは、九州王朝支配の確立で、国譲りとは、出雲王朝から九州王朝への国譲りの事であって、大和朝廷への国譲りではありません。それを大和朝廷への国譲りのように見せているのが、記紀だといわれています。大和王権の開始は、７０１年です。

　大国主はなぜ大穴牟遅神（おおあなむぢ）と呼ばれているのでしょうか。
王朝はどこにあったのでしょうか。　加茂岩倉遺跡の場所は、大原郡です。
当時の地図や『出雲国風土記』によると９つに分かれています。
（意宇・島根・秋鹿・楯縫・出雲・神門・飯石・仁多・大原の各郡）。大原郡、ここが出雲の別名大国（州）といわれている所です。

出雲王朝は、出雲郡のスサノオから始まり、他の８郡を従えたのでヤマタノオロチ退治の話にしたと考えられます。たぶん越の国の八族ではないかと思われます。それは冒頭で述べましたように、呉や越の亡国の民が、呉越同舟して黒潮分流に乗って列島にやってきた人達ではないかと考えられます。丹後半島には、船がそのまま入れる船宿（写真：伊根町）があります。あれは越の地方の風習だといわれています。

須佐之男命の娘である須勢理毘売命（すせ りびめのみこと）に婿に入ったのが、大国主（大穴牟遅神おおあなむぢ）ですが、実はスサノオを手引きしたのではないか。これは２つの勢力（征服・被征服）で、妥協が成立し始めているのではないのか。畿内での銅鐸文化の復活を象徴しているのではないか。出雲系の復活ではないのかと考えます。

最初にヤマタノオロチ退治で侵略されたのは、八雲系の多氏だと考えられますが、その後国譲りによって出雲系の多氏が逃れていったのは畿内の三輪山の麓です。唐古・鍵遺跡（からこ・かぎいせき）は、八雲系の多氏と出雲系の多氏によって開かれ、後にニギハヤヒ系の物部氏も関わって、巻向遺跡に発展する形になってくる訳です。だからあれは天皇家によって作られた遺跡では無い事になります。

解説：多氏（おおし／おおうじ）は、「多」を氏の名とする氏族。
日本最古の皇別氏族とされる。「太」「大」「意富」「飯富」「於保」とも記され、九州と畿内に系譜を伝える。皇別氏族屈指の古族であり、神武天皇の子の神八井耳命の後裔とされる。出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：皇別（こうべつ）とは、日本の皇室から、神武天皇以降に臣籍降下した分流・庶流の氏族を分類した用語。弘仁 6 年（815 年）に朝廷が編纂した古代氏族の系譜集『新撰姓氏録しんせんしょうじろく』で、天津神・国津神の子孫を指す神別、朝鮮半島・中国大陸その他から渡来した人々の子孫を指す諸蕃とともに用いられた。
出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：唐古・鍵遺跡（からこ・かぎいせき）は、奈良盆地中央部、標高約 48 メートル前後の沖積地、奈良県磯城郡（しきぐん）田原本町大字唐古及び大字鍵に立地する弥生時代の環濠集落遺跡。出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：纒向遺跡（まきむくいせき）は、奈良県桜井市の三輪山の北西麓一帯にある、弥生時代末期から古墳時代前期にかけての集落遺跡。国の史跡に指定されている。
3 世紀に始まる遺跡で、一帯は前方後円墳発祥の地とする研究者もいる。邪馬台国の中心地に比定する説があり、箸墓古墳などの 6 つの古墳が分布する。**遺跡からは弥生時代の集落は確認されておらず、環濠も検出されていない。銅鐸の破片や土坑が 2 基検出されているのみである。**出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

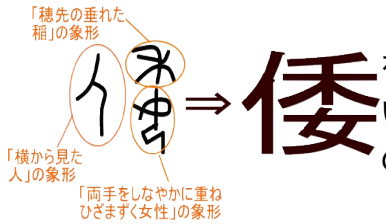
解説：ニギハヤヒ：『日本書紀』などの記述によれば、神武東征に先立ち、天照大神から十種の神宝を授かり天磐船に乗って河内国（大阪府交野市）の河上の地に天降り、その後大和国（奈良県）に移ったとされている。『先代旧事本紀』では、物部氏、穂積氏、尾張氏、海部氏、熊野国造らの祖神と伝える。出典: フリー百科事典『ウィキペディア』

　そしてこれらを滅ぼしたのは、九州の勢力であった。九州勢力も最初の王というのは金印国家（漢委奴国王印）の委奴国です。通説では、まだ漢委奴国王印（かんのわのなのこくおういん）と呼んで倭国の属国の奴国としていますが、あれは委奴国（いぬこく）が貰ったとの解釈が正しいと考えられます。読み：委・・イ(呉)(漢)　奴・・ド(漢)ヌ(呉)

　イヌというのは、現在「あいつはイヌにも劣る」といわれる様に侮蔑語にも使われていますが、これは最初に王国を作ったイヌ系の王族を卑しめる言葉と考えられます。なぜイヌが大事にされるかといいますと、中国の長江地方に、イヌを祖先と考える種族（シェ族）等がおります。彼らの伝承によればイヌが尻尾に稲穂をつけて帰ってきたことで稲作がはじまったとしています。それで彼らは豊かになっていったと伝承されています。

　金印の委奴国（いぬこく）、魏志倭人伝にも中に出てくる狗（いぬ）という漢字が使われている国が半島側（狗邪韓国）にも、九州側（狗奴国）にもあります。このイヌ系とは、南船系倭人の国の事を意味し、北九州から韓半島の南側にわたって倭国があったと示唆しているようです。　また「書紀」にある隼人の吠声（はいせい）と神事・祭事における警蹕（けいひつ）先払いの声が、イヌ系の王族の儀礼をとどめていると考えられます。

解説：警蹕（けいひつ）：天皇や貴人の通行などのときに、声を立てて人々をかしこまらせ、先払いをすること。また、その声。「おお」「しし」「おし」「おしおし」などと言った。みさきばらい。みさきおい。けいひち。出典: goo 国語辞書



　また倭国の倭という文字は、漢字学者によると稲が実って穂を垂れている姿で、実りの姿を表していると言われています。いわゆる倭国、倭人というのは、稲作国、稲作民を表しているのではないでしょうか。決して卑語ではないと思われます。

　最終的には、畿内の銅鐸文化圏も３世紀頃には、滅ぼされてしまった。３世紀というのは、九州王朝支配の確立で、国譲りとは、出雲王朝から九州王朝への国譲りの事であって、決して大和朝廷への国譲りではない。と述べました。

解説：二中歴にちゅうれき　　鎌倉時代の百科事典。13 巻。編者未詳。鎌倉末期の成立で、現存の増補版は文安年間（1444～1449）ころの成立とされる。平安時代の「掌中歴」と「懐中歴」を再編集したもので、人名・物名などを 81 項目にわたって列挙している。出典：デジタル大辞泉

　それでは、九州王朝は、いつできたのでしょうか。これは二中歴（年代歴）に書かれています。この中には継体から大化までの３１の年号が書かれています。それの最初の説明に、年始五百六十九年でそのうち無年号が３９年あって、継体（５１７年）が始まったと書いてあります。

「　二中歴　　年代暦　　（付西暦年数）
年始五百六十九年内世九年無号不記支干其間結縄刻木以成政
継体　　五 元丁酉 五一七～五二一
（～略～）
大化　　六 乙未　　六九五～七〇〇」
覧初要集云皇極天皇四年為大化元年
已上百八十四年々号世一代（不）記年号只人傳言　自大宝始立年号而已
・・以上部分掲載

最後の文は、「以上百八十四年、年号三十一代、年号は記さず。只、人の伝えて言う有り『大寶（大宝）より始めて年号を立つのみ』」と読み下すべきものと考えられます。つまり、年号は一八四年間三十一代にわたり使用継続してきたが（事情があり）今はそれを記さない、しかし、「大寶（大宝）」から始まったと言うのは言い伝えに過ぎない（以前からあったのだ）と言っているのです。

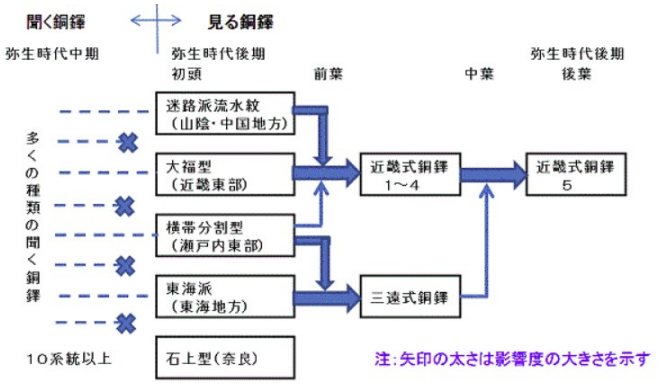
　上記を見ると、始まって５６９年と書いてあります。継体が５１７年ですから、５６９年遡ると、517-569=▲52 年（紀元前）なります。つまり紀元前５２年が九州王朝が生まれたと考えることができます。　まだこの時期に列島を支配できていなくとも、倭国としての金印国家（漢委奴国王印）の委奴国が、生まれてきたと考えられます。

　その頃は出雲王朝の時代に当たります。出雲王朝はいつ頃なのでしょうか。
銅鐸というのは紀元前２世紀～紀元後２世紀末頃までの約４００年間が銅鐸時代です。
これが出雲が中心の時代であったと考えられます。

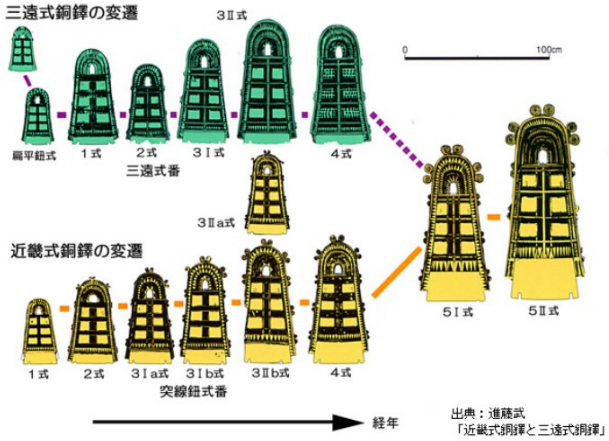
　銅鐸文化圏のところで、出雲が侵略を受けたので、その銅鐸勢力が逃げていったのが、近畿地方であると述べましたが、今度は考古学から見ると滋賀県守山市の伊勢遺跡（東西７００m南北４５０m３０ヘクタール）で環濠集落が見つかっています。
ここは縄文時代から室町時代にかけての複合遺跡であり、特に弥生時代後期の国内最大級の大型建物群で知られています。

　さらに野洲川下流域の銅鐸・青銅器の特徴について見ると、野洲市の大岩山では、24 個の銅鐸（どうたく）が出土しており、一ヶ所から見つかった銅鐸の数としては、島根県の加茂岩倉遺跡の３９個に次いで多い数です。大岩山銅鐸には、日本最大の銅鐸が含まれています。
また、栗東市の下鈎遺跡からは日本最小の銅鐸が見つかっています。

そのほか近江南部での銅鐸、青銅器に関して特徴的なことは：
①もっとも古い銅鐸から新しい銅鐸まで 100～150 年にわたるいろいろな銅鐸が出ている
②ここで銅鐸の形式の統合が行われたと考えられる（下図）
③銅鐸祭祀の最後を飾って大岩山に多量に埋納された
④銅剣が出土する最東地点である　・・こと。



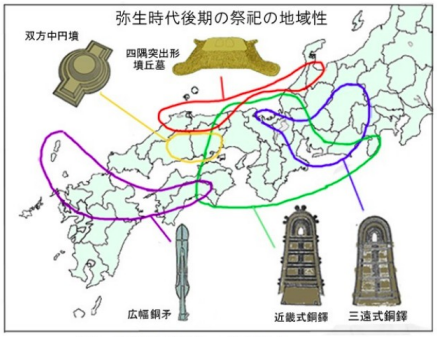
銅鐸の変遷の系譜（難波洋三氏作成）を改変



大岩山銅鐸弥生時代を特徴付ける金属器として、銅矛（どうほこ）、銅剣、銅戈（どうか）、銅鐸などがあります。地域と時代によって何を祭祀に用いていたかが異なりますが、野洲川下流域では、銅鐸の祭祀が弥生時代を通して行われていました。

明治 14 年（1881 年）に野洲市小篠原の山の中で遊んでいた子供によって、14 個の銅鐸が偶然見つかりました。また、昭和 37 年（1962 年）、東海道新幹線の工事に関連して 10 個の銅鐸が見つかりました。平成 8 年（1996 年）加茂岩倉遺跡で 39 個の銅鐸が出土するまでは、1 ヶ所で発見された銅鐸の数としては、日本最多でした。また、総長 135cm と、群を抜いて大きな銅鐸が見つかっており、日本最大の銅鐸です。

銅鐸は入れ子にし、向きを揃えて、聖なる三上山の麓に埋納されており、弥生時代の幕引きの祭祀が行われたと考えられています。これらの銅鐸の特徴は、大福型、近畿式、三遠式などいろいろな形式のものがあること、また製作時期についても西暦 50 年ごろのものから西暦 150～200 年頃のものまでいろいろな時代の銅鐸があることです。



出典：寺沢薫「王権誕生」に基づき作成

銅鐸表面に付けられている文様も、流水紋のものが 1 個ありました。バライエティに富んだ銅鐸の種類から考えると、びわ湖周辺の拠点集落それぞれが保有し、祭祀を行っていた銅鐸を持ち寄って、埋納祭祀をおこなったと考えられています。

埋納場所も、明治と昭和に発見された場所が 50 mほど離れており、2 回に分けて埋納されたと解釈されます。ただ、昭和に見つかった流水紋銅鐸 1 個はさらに 50 m離れた所から見つかっており、3 回埋納説もあります。

銅鐸の用途ですが、主として弥生初期末から中期につくられた小～中型の銅鐸は音を鳴らして「聞く銅鐸」で、弥生後期の中～大型銅鐸は飾って「見る銅鐸」と言われています。すなわち銅鐸の用途は、中期と後期で大きく異なっていました。

この観点で大岩山の銅鐸を見ると、主に中～大型の「見る銅鐸」になります。
大岩山に銅鐸を埋納した後は、鏡が祭祀に用いられるようになります。その後は、銅鐸は造られなくなり、大岩山の最大の銅鐸は、銅鐸の歴史では最新でかつ最後の銅鐸になります。

大岩山で見つかった銅鐸　【野洲市教委】

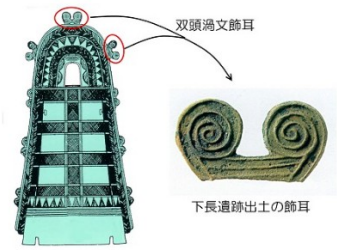
栗東市の下鈎遺跡からは、弥生時代中期の導水施設で高さ 3.5cm の日本最小の銅鐸が見つかっています。

日本で数十個の小銅鐸が見つかっていますが、「聞く銅鐸」や「見る銅鐸」とは違う目的で用いられたようです。大きな銅鐸が山麓や集落のはずれに埋納されるのに対し、小銅鐸は集落から見るかるケースが多いようです。下鈎遺跡の小銅鐸は、聖なる水を得るための儀式で鈴のような使い方をしたのかも知れません。
大岩山銅鐸の外にも、野洲川下流域と周辺で 9 個の銅鐸が見つかっています。
守山市の新庄では、銅鐸の歴史の中でも古い形式の新庄銅鐸が 1 個出土しています。江戸時代の記録では 4 個見つかっていますが、現存するのは 1 個のみで倉敷市に保管されています。
野洲川下流域に隣接する東近江市の山面で、新庄銅鐸に継ぐ古さの銅鐸が 2 点見つかっています。9 個の銅鐸は、全般に大岩山銅鐸よりも古い形式のものが多く、「聞く銅鐸」として使われていました。

大岩山で見つかっている新しい世代の「見る銅鐸」と考え合わせると、近江地区では古くから「聞く銅鐸」の祭祀が行われ、弥生時代後期には「見る銅鐸」の祭祀に変容しながらも銅鐸を使った儀礼が続いていたことが判ります。

銅鐸は主に山陰、四国、近畿、東海などで使われていましたが、弥生中期（聞く銅鐸）～弥生後期（見る銅鐸）を通して使っていたのは近江を含む近畿だけです。

守山市の下長遺跡（しもながいせき）から銅鐸の飾耳が一点出土しています。下長遺跡は弥生遺時代後期に出現し、伊勢遺跡群の一つとして機能していました。
しかし、下長遺跡が最も栄えるのが古墳時代に入ってからで、豪族の居館が建ち、河川・湖上貿易の拠点となります。すなわち、銅鐸の祭祀の終焉に立会い、その後の鏡の祭祀を行った遺跡です。



切落された銅鐸の耳（下長遺跡）【守山市教委】

そこから埋納したはずの銅鐸の飾り耳を切り落としたものが出土したのです。およそ 70cm クラスの銅鐸の飾耳だと推測されますが、対応する銅鐸は見つかっていません。

青銅器は非常に堅固で銅剣や銅矛として用いられるものでもあり、銅鐸も叩いて割れるものではありません。また、簡単に切り落とせるものでもありません。でも、高温に加熱して柔らかくしたら切ることができます。銅鐸祭祀の終焉にあたり、これまで大切にしてきたものを忘れないために隠し持ったのか、あるいはお守りとして残したのかも知れません。

銅鐸をつくる鋳型が多く見つかり、銅鐸の生産拠点と見なされていたのは、北九州と近畿の摂津、大和（唐古・鍵）などです。面白いことに多量の銅鐸が出土している、島根や淡路島、和歌山からは鋳型が出ていません。

一方、銅鐸の出土が極めて少ない北九州で銅鐸の鋳型が見つかっています。近江は銅鐸の出土も多く、銅鐸の鋳型や青銅器生産に関連するふいご部品が見つかっています。

銅鐸の鋳型としては、守山市の服部遺跡や栗東市の下鈎遺跡、野洲市の下々塚遺跡から見つかっており、とくに下鈎遺跡からは青銅残滓（ざんし）が出ており、青銅器をつくっていたのは間違いないと考えられます。

上：土製鋳型の内面と下：外面

鋳型（服部遺跡）【守山市教委】

鋳型（服部遺跡）
【守山市教委】

鋳型と青銅残滓（下鈎遺跡）
【栗東市教委】

興味深いのは、服部遺跡から大阪湾型銅戈の石製鋳型の一部が見つかっていることです。銅鐸の鋳型も出ていることから服部遺跡で青銅品を鋳造していた可能性は強く、ここで大阪湾型銅戈を作って近畿湾岸圏へ供給していたと考えられます。

唐古・鍵遺跡でも「見る銅鐸」の土製鋳型が多数見つかっていますが、大岩山の近畿式銅鐸は地元で設計し製作していた可能性があります。

このように、野洲川下流域では弥生中期から後期にわたり銅鐸の祭祀を行っていて、銅鐸祭祀の終焉にあたり、大岩山に埋納して、弥生時代が終わっていること。
さらに野洲川下流域には日本で最小の銅鐸と最大の銅鐸があることなどから、
出雲から近畿圏への変遷を考えると、近畿式銅鐸はここで生産していた可能性があると考えられます。　出典：NPO 法人　守山弥生遺跡研究会　ホームページより部分掲載

「追記」：鉄鐸については、『先代旧事本紀』と『古語拾遺』が記す「天岩屋戸」条に、

天岩屋戸に籠った天照大神を招きだすために、天目一箇神（あまのめひとつかみ）が種々の刀・斧・鐸（古くは佐那伎〔さなぎ〕と言う）を作ったとあります。
この時の鉄鐸が鋳造か鍛造(たんぞう)か、製法は分かりません。

そして天細売（あめのうずめ）が、鉄鐸を付けた矛を手に持って樽の上で踊ったとあることから、往時は矛や杖などの器具に音を出す飾りとして使用したと思われます。なお、鉄鐸は古墳時代まで見られ、その時代の鉄鐸は、扇形、あるいは台形に裁断した鉄板を丸めるように両端を合わせて鐸身としており、鍛造で作ったとみられます。（早野浩二「古墳時代の鉄鐸について」 研究紀要 第９号 2008 年 Web）（上図）。）

また、藤森栄一著「銅鐸」学生社刊(s39.8.5 初版)によれば、いま国内の古社で鉄鐸を蔵するもの、諏訪神社上社、小野神社、上伊那郡小野村矢彦神社である。諏訪神社には、現在六口ずつ三組あり、形状・大きさは大同小異である。（左図）

社伝によると往古神使の巡回に使用した宝鐸で、室町時代には、これを打ちならして誓約の証とした記録がある。古来の神宝中でも、特別な位置を占めた重宝である。製作の時期については、資料及びそれ自体に記録がないのでわからないが、相当年代までさかのぼり売ることは否定できない。

諏訪大明神画詞（えことば）には、「大鈴ノゴトシ」とあり池原香穉（いけはらかわか）のみともの数には「さなぎの鈴」と記しており、神社では宝鈴とよんでいる。
古典にいう佐奈伎がこれにあたるのだろう。(以上　藤森栄一著「銅鐸」より引用。)
（了）

参考資料

・卑弥呼の謎(19721024) 安本美典（やすもとびてん）　講談社現代新書
・邪馬台国はなかった(19771010)　古田武彦（ふるたたけひこ）角川文庫
・風土記にいた卑弥呼(19880420)　古田武彦（ふるたたけひこ）朝日文庫
・逆説の日本史１～４ (19980101)　井沢元彦（いざわもとひこ）小学館文庫
・倭国伝（20100913:中国正史に描かれた日本）、藤堂明保・竹田晃・影山輝圀、株式会社講談社
・別冊宝島 2465（20160627:古代史再検証邪馬台国とは何か）、瀧音能之、株式会社宝島社
・新訂古事記　現代語訳付　武田祐吉訳注　中村啓信補訂　角川ソフィア文庫
・日本書紀上下　全現代語訳　宇治谷孟（うじたにつとむ）、鈴木哲、株式会社講談社
・続日本紀　朝日新聞本（全十二巻佐伯有義、朝日新聞社、昭和 15）三・四を体系本・諸本で補訂
・その他ネット検索